

7 課

5月15日

シナイでの契約



安息日午後 5月8日

暗唱聖句

「あなたたちは見た／わたしがエジプト人にしたこと／また、あなたたちを鷲の翼に乗せて／わたしのもとに連れて来たことを。」(出エジプト記 19 : 4、新共同訳)

「あなたがたは、わたしがエジプトびとにした事と、あなたがたを鷲の翼に載せてわたしの所にこさせたことを見た。」(出エジプト記 19 : 4、口語訳)

今週の聖句

申命記 1 : 29～31、ホセア 11 : 1、黙示録 5 : 9、申命記 29 : 9～12 (口語訳 10～13)、出エジプト記 19 : 5、6、ローマ 6 : 1、2、黙示録 14 : 12、ローマ 10 : 3

今週のテーマ

7人兄弟の1人である幼い少年が事故に遭い、病院に運ばれました。彼は今まで、コップに少しのミルクしか飲んだことがありません。コップ1杯のミルクを、いつも兄弟2、3人で分け合っていたからです。看護師が大きなコップ1杯のミルクを持ってきました。少年は、家でのことを思い出しながら、そのミルクをじっと見つめて言いました。「どこまで飲んでいいの？」看護師は込み上げるもので胸がいっぱいになり、目に涙をためながら言いました。「坊や、全部飲んでいいのよ。全部お飲みなさい！」(H・M・S・リチャード『預言の声ニュース』「無償の恵み」1950年6月号4ページ、英文)。

この少年のように、救いの井戸からたっぷり飲むことは、私たちにとってもそうであるように、古代イスラエルにとって、特権でした。数世紀にわたる捕囚と圧制からのイスラエルの解放は、驚くべき天の恵みの表れでした。同じように、神の恵みは私たちを罪から解放するために働くのです。

今週のポイント

主はご自分とイスラエルとの関係を何にたとえていますか。出エジプトとシナイ山での物語は、個人的救いの観点からどのように共通していますか。シナイでの契約において律法はどのような役割を持っていますか。

イスラエルの民は、何世紀にもわたってエジプトの異教にどっぷりつかっていました。その経験を通して、疑いなく彼らの神の知識、神のみ心、神の慈しみは、おぼろげなものになっていました。

主は彼らをどのようにして再びご自身のもとに取り戻されるのでしょうか。

まず初めに、神はイスラエルに対する愛の純粹さを、救いの御業を通してお示しになります。

問1 次の二つの記述は、主がイスラエルをエジプトから導き出す様子をどのように描いていますか。

(1) 出エジプト記 19 : 4、申命記 32 : 10~12

(2) 申命記 1 : 29~31、ホセア 11 : 1

問2 これらの描写は、その民に対する神の姿勢について、イスラエルに（そして私たちに）何を教えていますか。

これらの描写は、私たちの神が私たちの絶望的な弱さを深く心にかけておられることを表しています。詩編103 : 13、14を読んでください。鷲の姿と子を抱きかかえる父親の姿に、私たちは私たちの幸せを願う神の思いを感じるので、優しく、支えとなり、守り、励ます主の願いは、私たちが完全に成熟したものであることなのです。

「鷲は、その類まれな若鳥への愛情で知られる。鷲はまた、山の頂に暮らすことでも知られる。若鳥に飛ぶことを教えるために、鷲は若鳥をその背中に載せてシナイの平野を見わたすほどの高みへと昇り、そして彼らを深みへと突き落とすのである。若鳥が幼すぎたり、混乱したりしたときは、父親の鷲は高みから舞い降り、若鳥の下に入ってその背で捕らえ、そして再び険しい岩山の高巣へと舞い上がる。そして天の声が言うのを聞く。『わたしはどのようにあなたをエジプトからわたしのもとに導き出したか』」（ジョージ・ナイト『物語の神学』128ページ、英文）。

あなた自身の経験の中で、神の私たちに対する無私の関心を表すと思える例えがありますか。あなたの住む国の文化の中に何か良い例えがありますか。

問3 出エジプト記6:6、7を読んでください。この聖句にたびたび出てくる、「わたし」という言葉に注意して読むと、神との契約関係において、人間に対する神の役割のどんな原則を見ることができますか（何回「わたし」が出てくるかに注意してみてください）。

イスラエルのエジプト捕囚からの救いと、ノアとその家族の洪水からの救いは、モーセが書き残した二つの顕著な救済の記録です。両者とも救いの科学に洞察を提供するものですが、出エジプトの記録により、明確で基本的な救いの型を見ることができます。

神が（モーセを通して）イスラエルに、「わたしは……あなたたちを贖う^{あがな}」と言われるとき（出6:6）、字義通りには、「わたしは『親族』あるいは『身受け人』として贖う」と言っておられるのです。

「〔出6章〕6節の『贖う』という言葉は、自分の家族の一員を買い戻すこと、または身内の者を、代価を払って身受けすることを意味し、特に、借金のために奴隷になっているか、なろうとしている場合を意味する。イスラエルは明らかに、地上に彼らを贖う親族を持っていなかった。しかし、神が今、イスラエルの親族となり、身受け人となるのであった」（バーナード・ラム『神の出口』50ページ、英文）。

問4 あなたは、神が「身受け人」となり、神の民を奴隷から買い戻すという思想をどのように理解しますか。支払われるべき代価はいくらなのでしょう。私たちにどれほどの価値があるのでしょうか（マコ10:45、1テモ2:6、黙5:9参照）。

出エジプト記3:8で神は、イスラエルを救うために「降って行き」と言われます。これは神が人間に^{かみ}関わられるときの一般的なヘブライ語の表現です。神は天におられ、私たちは地上にいます。神が地上に「降って」来られて初めて、神は私たちを贖うことができになるのです。この贖いの思想はその真の意味において、イエスが私たちのために降り、生き、苦しみを受け、死に、そしてよみがえるときにのみ、私たちは贖われることを意味するのです。「言^{ことば}は肉となって、わたしたちの間に宿られた」（ヨハ1:14）とのみ言葉は、神が私たちを救うために「降って」来られたことを表すもう一つの表現なのです。

出エジプト記は、読者の注意を三つの主な出来事に惹きつけます。三つの大きな山のように、出エジプトそのもの、契約の制定、そして聖所の幕屋の建築がふもとの丘のような小さな出来事の上にそびえています。三つの中でも、出エジプト記19章から24章に記されている契約の制定は、エベレスト山に相当するものでした。出エジプト記19章から24章を概観すると、出来事の関係と順序がわかります。

もし、下に挙げた聖句をすべて読む時間がなければ、出来事の順序に注目してください。

- (1) 主に救出された後のイスラエルのシナイへの到着と宿営 (出19:1、2)
- (2) 神のイスラエルに対する契約の申し出 (出19:3~6)
- (3) 契約を受諾したイスラエルの応答 (出19:7、8)
- (4) 正式に契約を受けるための準備 (出19:9~25)
- (5) 十戒の宣言 (出20:1~17)
- (6) 契約の仲介者としてのモーセ (出20:18~21)
- (7) 読み上げられた契約の原則 (出20:22 ~出23:22)
- (8) 契約の確認と同意 (出24:1~18)

この契約は救いの計画の中で、きわめて重大な役割を果たすものです。それは(アダム、ノア、アブラハムに続いて)、聖書に記録された4番目の契約であり、特に聖所の儀式の全体を含むそれらの契約の中に、神は以前より完全な形でご自身を表されたのでした。こうして、聖所は、神が民に救いの計画を示す手段となり、さらにそれらは世に表されるのでした。

主はイスラエルをエジプトの捕囚から贖^{あがな}い出されましたが、主は彼らに、単なる物理的な捕囚からの自由以上の、贖いが持つより大きな、より重要な意味を理解させたいと望まれました。主は彼らを、究極の捕囚である罪から贖いたいと望まれたのでした。そしてそれは、聖所の奉仕のうちに象徴、ひな型として教えられたメシアの犠牲を通してのみ実現するのでした。それこそが、この契約の真の意味であり、目的なのでした。この契約は、主が墮落した人類に提供された救いの契約なしには、もはや無意味なのです。この救いの契約こそが、エデンで与えられたものであり、シナイで与えられた契約なのです。

神とイスラエルの民の間の契約は、なぜ必要だったのでしょうか(申29:9~12 [口語訳10~13節] 参照、契約の持つ関係性に再度注意してください)。

「今、もしわたしの声に聞き従い／わたしの契約を守るならば／あなたたちはすべての民の間であって／わたしの宝となる。世界はすべてわたしのものである。あなたたちは、わたしにとって／祭司の王国、聖なる国民となる。これが、イスラエルの人々に語るべき言葉である」(出19:5、6)。

これらの聖句の中で、主はイスラエルの子らとの主の契約を提示しておられます。主は彼らを召しておられますが、その召しは彼らの選びなしに自動的に彼らに与えられるものではありません。彼らは協力しなければなりません。彼らのエジプトからの救出にも彼らの協力が必要でした。もし彼らが、(家の鴨居に血を塗ると言った) 主の言われたことを行わなかったなら、彼らが救い出されることはなかったでしょう。それは単純なことでした。

ここで主は、「あなたたちが好むと好まざるとにかかわらず、あなたたちはわたしの宝となり、祭司の国民となる」と言われたわけではありません。それがこの契約の目的ではなく、この聖句が言わんとすることでもありません。

問5 出エジプト記 19:5、6 をもう一度読んでください。信仰による義の文脈で、この聖句をどのように理解すれば良いでしょうか。主に従いなさいとの命令は、恵みによる救いの考えを無効にするのでしょうか(ロマ3:19~24、6:1、2、7:7、黙14:12参照)。

「私たちは服従によって救いを買うわけではありません。救いは神から価なしに与えられる賜物であって、信仰によって受けるのです。服従は信仰の実です」(『キリストへの道 改訂第3版文庫版』85ページ)

主がイスラエル民族のために喜んでしたいと望まれたことについて考えてください。主は彼らを奇跡的にエジプトの奴隷の境遇から救い出すだけでなく、彼らをご自身が所有する宝、祭司の国民にしたいと望まれました。すべては、諸国民に福音を伝えるために彼らを用いるという目的のためでした。彼らがなすべきことのすべては、主に応えて従うことでした。

私たちの1対1の主との個人的な経験においても、私たちがきょう学んだ同じ原則が反映されますか。

一見、すべてがうまくいっているように見えました。主は主の民を救い出し、彼らに契約の約束を差し出し、彼らは同意します。彼らは主がお命じになることすべてを守ります。それが「天で作られた」取り決めでした。

問6 下の聖句はそれぞれ、主の契約に対するイスラエルの応答について、私たちにどんな洞察を与えてくれますか。

ローマ9:31、32

ローマ10:3

ヘブライ4:1、2

神がお命じになることが何であれ、私たちと神との関係は信仰に基づくものでなければなりません。信仰が基礎を造り、その上に行いが続くのです。それはイスラエルの時代にそうであったように、今日も変わらない原則なのです。

問7 しかしながら聖書が何度も何度も行いを強調しているとすれば、なぜ神の目に行いは受け入れられないのでしょうか (イザ53:6、64:6、ロマ3:23 参照)。

不幸にして、ヘブライ人は、服従は救いの結果ではなく、救いの手段であると信じていました。彼らは、信仰によってもたらされる「神の義」ではなく、律法に対する服従の中に義を求めました。シナイの契約は、多くの詳細な指示と律法を伴うものでしたが、先に与えられたすべての契約と同じように、恵みの契約としてデザインされたものでした。この無償で与えられる恵みは服従へと導く心の変化をもたらします。問題はもちろん、彼らが従おうとすることではなく (律法は彼らに従うことを要求します)、彼らが差し出そうとする「服従」の種類なのです。

ローマ10:3を、特に最後の部分に注意深く読んでください。パウロはどんな点を指摘していますか。自分の義を確立しようとする人々はどうなりますか。なぜそのような試みが、罪、不義、反逆に至るのでしょうか。私たちは自分の生活を振り返って、同じ過ちに陥ってはいないでしょうか。

参考資料として、『人類のあけぼの』第25章「エジプト脱出」、第26章「紅海からシナイへ」、第27章「十戒」を読みましょう。

「^{とら}囚われの精神は、我々の力で律法の要求を達成しようとする律法主義的宗教に一致した生き方を求めることから生ずる。我々の希望は、我々がキリスト・イエスにある信仰による恵みの契約である、『アブラハム契約』の下に身を置くことにある。今日我々に語られ、我々がそこに希望を見いだすのと同じ福音なのである。アブラハムは、我々の信仰の創始者であり、完成者であるイエスを見つめていたのである」(『SDA聖書注解』第6巻1077ページ、英文)。

「エジプトの奴隷であった間に、イスラエル人の多くは、全くと言っていいほど神を忘れ、その戒めを異邦の習慣や伝統と混同してしまっていた。神は彼らをシナイに導き、そこでご自分の声で律法を宣言された」(『希望への光』171ページ、『人類のあけぼの』上巻393ページ)。

話し合いのための質問

- ① イスラエルの物理的、霊的自由を維持するためにデザインされた契約関係とはどのようなものでしたか (レビ 26 : 3~13 参照、申 28 : 1~15 と比較)。
- ② 出エジプト記 19 : 5、6 を再度読んでください。主は、「世界はすべてわたしのものである」と述べておられることに注意してください。特に、これらの民との契約を確立することを望まれた文脈の中で考えるとき、なぜ主はこのように言われたのでしょうか。私たちの安息日の理解と、その意味は、この聖句とどのように調和しますか。

まとめ

神がシナイでイスラエルと結ばれた契約は、恵みの契約でした。驚くべきエジプトの奴隷の境遇からの救出という、主の恵みに満ちた愛と配慮の十分な証拠を与えることによって、神は民を契約の中に招かれたのでした。イスラエルはこれに肯定的に応答しますが、彼らには愛によって働く真の信仰が欠けていました。彼らののちの歴史のほとんどが示すように、彼らは契約の真の性質を理解せず、その契約を行いによる救いへと墮落させたのでした。私たちはイスラエルの失敗を繰り返して、罪人へと届く驚くべき恵みを軽視する必要はないのです。